

1930年代のハンセン病社会事業に関する研究（第1報）

－「らい予防デー」における中央の取組の検討－

○ 長崎大学 平田勝政（2816）

キーワード：ハンセン病、らい予防デー、光田健輔

1. 研究目的

本研究は、「癩（らい）予防デー」に注目して1930年代の「救癩」運動の展開とその帰結としての日本的ハンセン病社会事業確立の過程を実証的に解明していこうとするものである。その第1報として本研究では、拙稿（2010,2013,2014）で解明した1931年6月25日を中心とする希望社主導の「癩病根絶期成同盟会」の運動が、その後の「癩予防デー」としてどのように継承され、隔離主義の「救癩」運動として強化・徹底されていったのか、その変遷と特徴を解明しようとするものである。

2. 研究の視点および方法

「癩予防デー」の開始年については、1931年、1932年、1933年の所説が存在するが、その相違を生む原因には1930年代の「癩予防デー」に関する先行研究の不十分さがある。そこで、本研究では、全国規模で国民に広く影響を及ぼした1930年代の「癩予防デー」のラジオ放送番組とその内容に注目して、主に新聞掲載の番組案内資料（講演要旨等）を分析対象にして検討作業をおこない、中央の取組の変遷とその特質を解明して、今後の全国各地（植民地を含む）における「癩予防デー」の展開過程に関する研究の手がかりを得ようとするものである。

3. 倫理的配慮

すでに「癩」等の表記に見られるように、人権尊重の見地からすると不適切語が使用されているが、以下でも歴史的用語として「癩」等を使用することをお断りしておく。

4. 研究結果

(1) 1930年代の「癩予防デー」におけるラジオ放送の変遷

- ①1931. 6. 25：光田健輔（長島愛生園長）が、JOAK（東京）より「癩病の予防と根絶」を講演。
- ②1932. 6. 25：三室戸敬光（癩病根絶期成同盟会長）が AK より「国民の保健と癩病」を講演。先立つ23日に、林文雄（長島愛生園）が、JOBK（大阪）より「癩を救ふ三つの力」を講演。
- ③1933. 6. 25：山本達雄（内務大臣）が、AKより「癩の予防根絶」を講演。④1934. 6. 25：潮恵之輔（内務次官）が、AKより「先づ根絶せねばならぬ病氣」を講演。⑤1935. 6. 25：前日の24日に光田健輔が、JOKK（岡山）より全国中継で「癩問題に関する婦人の責務」を講演。⑥1936. 6. 25：林芳信（全生病院長）が、AKより「癩の予防と社会的施設に就て」を講演。⑦1937. 6. 25：挟間茂（内務省衛生局長）が、JOCK（名古屋）より全国中継で「癩予防施設に就て」を講演。⑧1938. 6. 25：廣瀬久忠（厚生次官）が、AKより「癩予防日に際して」を講演。⑨1939. 6. 25：AKより、午後3時から宮崎松記（九州療養所長）が「癩予防と婦人の力」を講演。午後（夜）に女優の田村秋子が物語「小島の春」（小川正子作・岸田國士編輯）を朗読。

⑩1940.6.25: AKより、午前中に林芳信が「癩の知識」を講演、午後(夜)に吉田茂(厚生大臣)が「癩予防事業に就て」を講演。都市放送が24・25日の2日連続で朗読「小島の春」を放送。なお、1941年6月25日には、児玉九一(厚生次官)の「御仁慈の賜物」の放送がある。

(2) 1930年代の「癩予防デー」におけるラジオ放送の内容(概要)

①の光田講演は、皇太后陛下(貞明皇后)が示された「癩病救済の範」(1930.8.9の御沙汰と1930.11.10の下賜・表彰)を「歴史的有難き教訓」として「国民が遵奉する」ことが重要であり、「願はくは毎年陛下の御生れ給ひし今日を国民の血液を清むる聖日」として「国民一致」の「癩予防運動」が展開されることを提起した。②の三室戸講演は、皇后陛下の御仁慈に言及した上で、「らい病に関する認識を一般家庭の方々に深めていただくこと、そして「一日も早くこの病の根絶を期する為の国民運動に目覚めていただく」ことを強調した。②の林講演は、藤野(1993:102~103)参照。③の山本講演は、本年(1933年)6月25日(=「皇太后陛下御誕辰の日」)をもって「癩(らい)予防デー」としたこと、「癩(らい)は遺伝病ではなくて伝染病であること」、「その予防の方法も確立され、…施設も充実しつつあるので…、国民は協力してその施設を活用し、一方療養所に入れないで居る患者に対しても、十分に保護指導を加えて、日本からこの不幸な病毒を一掃することに努力すべきである」と述べた。④の潮講演(紙幅の関係で省略:全文は「愛生」8号掲載)。⑤の光田講演は、大阪朝日新聞がその要旨を「癩病は遺伝病ではなく伝染病で、殊に小児を冒し易い。したがって家庭の主婦として癩の病性を知りその愛児を伝染の危険より護ることは当然の責務であると説く」と簡潔に報じている(全文は「愛生」5巻6号掲載)。⑥の林講演は、「我等は皇紀二千六百年を期して、官民総力一致、療養施設の拡充を計りて患者一万人収容を実現し、我が民族の一大禍根たるこの悪疾を根絶し以て愈々国利民福の増進を期せられんことを切望して止まざる次第である」と講演を締め括った。⑦⑧の講演(省略)。⑨の宮崎講演は、「文明国で尚癩が問題になって居るのは我日本のみ」と訴え、⑨の物語「小島の春」は、多くの新聞が田村の写真入で番組紹介をしている。東京朝日新聞は、「救癩戦士のルポルタージュである小川正子作『小島の春』は、この若き戦士のヒューマニスティックな熱情と行動、救済されねばならぬ患者達の世に入れられず人に親しまれない悲しい境遇を、人々に知らせ訴えて深く感動せしめるものである」と評し、また多くの新聞掲載の番組要旨は、「収容に行った此の作者自身、複雑な混乱を感ずるけれども、かくては此の聖なる浄化事業の蹉跎となるとして…自ら鞭打ち雄々しく事業を続けていくのである」と結んで、隔離収容を肯定した。「小島の春」は⑩でも朗読される(⑩の林・吉田講演は省略)。

5. 考察(まとめ)

「癩予防デー」は、正確には1933年に開始されたが、後に『光田健輔と日本のらい予防事業』の「らい年表」(40頁)で1931年6月25日とされ、以後それが踏襲された。『飛騨に生まれて』(74頁)で宮川量は、「癩予防デーの基礎を作」ったのは希望社による「昭和四、五年より」の取組(運動)であり、1931.6.25の全国規模での「癩絶滅講演会」であるとしている。

(付記)2014年度科学研究費補助金(課題番号23530724)による研究成果の一部である。